

2010 年度「教育制度論」総括

学校教育（教育学）・山本久雄

1. 授業の概要

後学期火曜 2 時限に大講義室で実施，当初の登録者は 146 名，大部分は学校教育教員養成課程と特別支援教育教員養成課程の 1 回生である。授業は全ての教員免許状取得のための必修科目（教職科目 A）であり，免許法規に言う「教育に関する社会的，制度的，経営的事項」を扱う科目である。到達目標は，以下である。

（1）教育の社会的，制度的又は経営的な事項についての基礎知識を習得し，それらに関する基礎概念を正確に説明できる。（知識・思考）

（2）今日の教育改革の動向を自ら正確に把握し，それらの意義・効果・問題点を主体的に考え，それを分かりやすく論述・表現できる。（知識・思考，技能・表現）

また，「教職課程のディプロマ・ポリシー（DP）」の観点からすれば「知識・理解」に重点を置いた内容ということになる。

その内容は，教員としての職務遂行に直接かかわるものであり，従って自らを教員としてリアルに仮想できれば否が応でもその内容には興味が湧いて来るはずのものである。ただ，受講生にとっては直接経験の裏打ちを持たず，概してなじみにくいものであることは否めない。そこで，例年通り，内容を，教室内で教員と児童生徒との相互作用（指導・学習）が安定的に（不確定・不安定要因に左右されずに）行われるために「教室の外」でどのような配慮・取組が行われているか，という視点で構成した。

例年同様，毎回，理解を助けるためにハンドアウト（プリント）を作成し，そこに内容の概略を示すほか，関連法規の条文，政府審議会の答申，関連新聞記事，統計調査の結果等載せた。また，プリントには要所要所に空欄を設け，そこに重要語句を記入させることにより授業中の緊張の持続を図った。また，授業が上滑りとなることを避けるため，あえてスライドの使用を控

え，その画面もプリントに取り込んだ。そして，毎回の授業の最後に小紙片を配布し，まとめ・総括を記して貰った。

2. 本年度，意識して取り組んだこと

（1）プリントに工夫をこらす

「知識・理解」にとってプリントは重要である。習得・理解すべき大量の知識を，トピックごとにいわば構造化し，シンプルに可視化したプリントは理解・把握を容易にし，知ることの楽しさを実感させる。プリントの充実は，見直しと改善を積み重ねることによってのみ可能となる。今年は，特に，授業を実施した後，直ちに加筆修正を試みた。

（2）「全国学力・学習状況調査」の結果に言及

授業内容への関心を喚起するため，今年は特に平成 19 年度以降の「全国学力・学習状況調査」の結果をグラフ化し，多くの機会に言及してみた。これによって，活用能力を問う，いわゆる「B 問題」において学力格差が拡大し，特に底辺層が学年進捗とともに拡大していることなどをリアルに把握することができ，学習に興味関心が出てくることを期待した。ただ，この種の試みの効果を，エビデンスをもって測定するのは困難である。

3. 検証

（1）小紙片

例年通り，毎回の授業の終わりに小紙片を配布し，そこに総括の記入を求めた（具体的には，「今日学んだこと」，「今日の授業で最も印象深かったこと」等の指示を出した）。それは毎回の授業を検証するためのものだが，実は授業者と受講者とのコミュニケーションのツールとしての意味が大きい。そこに感じられる受講者の息吹は授業実施への意欲，改善への意欲を喚起してくれる。

なお、この小紙片には出席管理のため記名を求め、記入内容は3段階で評価することを通知していた。従って、そこに記載された内容はそうした前提で読み込む必要がある。

(2) アンケート

例年通り授業最終日に以下の項目でアンケートを実施し、無記名で回答を求めた。各項目に対し、4段階（「強い肯定」、「肯定」、「否定」、「強い否定」）で回答を求めた。質問は、以下である。

① 学習成果

- ・ 総じて授業内容を把握できたか、
- ・ 新しい知識を得られたか、
- ・ 内容に興味をもてたか、

② 学習意欲の喚起の成否

- ・ 授業外学習のためプリントを活用したか
- ・ プrintの事前配布を希望するか、
- ・ 授業外学習を促進するため宿題を出した方がいいか、

③ プrintの適否

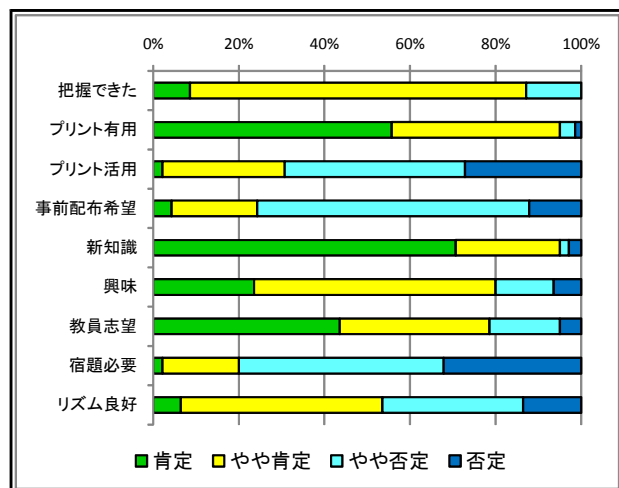
- ・ プrintは学習に役立ったか

④ その他

- ・ 教員志望か
- ・ 睡眠、食事、生活リズムは良好か

④は、①～③の意識が教員志望の有無、睡眠、食事、生活リズムの適否に関するのではないかと、との問題意識から設定したものである。

まず、その回答結果を単純に集計すると以下のような割合となる。

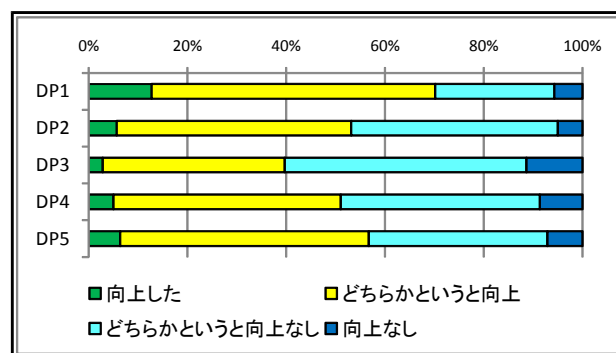


これによると、

1) 総じて、授業内容を把握できた、プリントは有用だった、新知識を得られた、興味ある内容だった、についてはおよそ8割以上の肯定的回答を得た。従って、少なくとも、アンケート調査の回答からは、授業の理解、プリントの有用性は確保できたように思える。

2) 授業時間外学習のためにプリントを活用した、プリントの事前配布を希望する、授業時間外学習を促進するため宿題を出した方がいい、については、肯定的回答は2,3割にとどまった。学習意欲を喚起する、という点については不十分であったと言わざるを得ない。

また、アンケートにおいては、「教職課程のDP」の各項目について、「受講前と比較してどの程度向上したかも問うてみた。その結果は以下である。

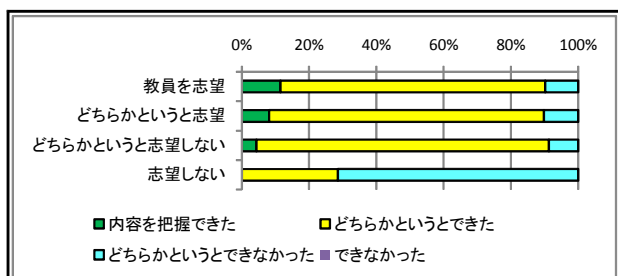


DP 1（知識）についておよそ7割が肯定的な回答をしたことは上記と符号する。ただ、DP 5（「教育的愛情を持って児童・生徒に接することができる」とともに、多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる」）は、授業の設計・展開において殆ど意識しなかった点であるが、それに対して6割近くが向上した、と回答している点は、理解しがたい。作為の意図と結果が一致しないことはしばしばあるが、この場合もそうである。あるいは、アンケート実施の方法上の問題が背後にあると考えるべきか。

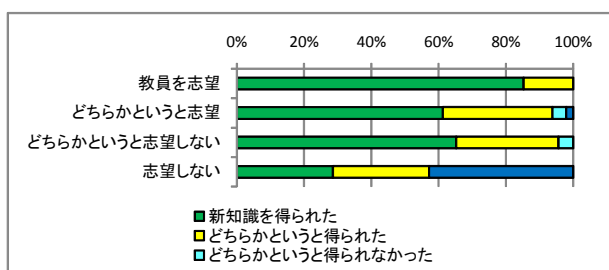
次に、上記回答が教員志望の有無・強弱によってどのような状況となるかを探ってみた。グラフから明らかなように、主として1回生から成る受講生のおよそ2割が教員志望について否定的な回答をしている。この授業も含め、良き教員の養成を目的と

する教育組織のカリキュラムを構成する授業の評価、成否において、教員志望の有無・強弱はどの程度影響するのか、という問題意識からである。

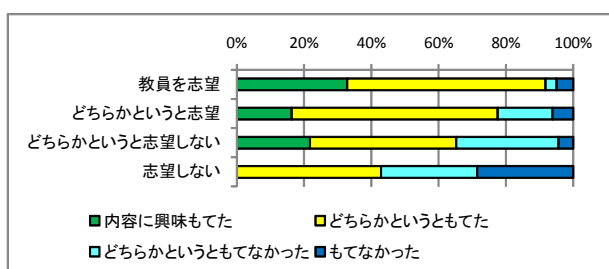
1) 内容を把握できたか



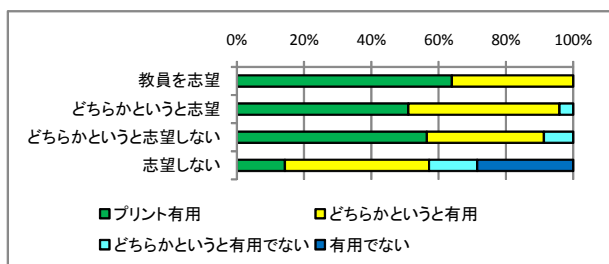
2) 新しい知識が得られたか



3) 授業内容に興味をもてたか



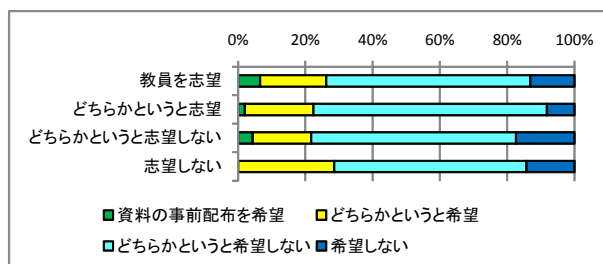
4) プリントは有用であったか



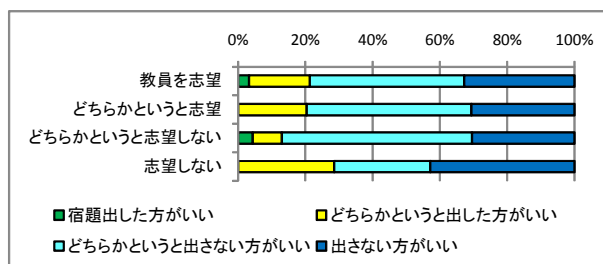
これらの質問は、実質的には授業の総括的な評価に関係するものである。概して肯定的な回答が多い中で、明確に教員を志望しない層は否定的である。彼・彼女らにとって、教員となることを前提に組み立てられている授業内容に興味を沸かす、従って、把握できず、「新しい知識は得られなかった」、プリントは有用でなかった、が多い

のは当然であろう。

4) 予習のため資料の事前配付を希望するか



5) 宿題は出した方がよいのか



これらについては教員志望の有無に関係なく、概して否定的な回答であった。

4. 総括と次年度に向けての取り組み

これまでの記述で明らかのように、学習の積極性という点では課題を残したが、概ね、「教室の外」での配慮については理解が得られた。従って、授業の所期の目的は達せられた。ただ、自発的な授業時間外の促進という点でははなはだ心許ない。自発的な取り組みを期待して、それに関する情報提供に限定するのは不十分なのであろうか。また、1回生の段階で教員を志望しない学生が2割いるという現実には重い。彼・彼女らにとって、教職科目のみならず、教育学部の教員養成カリキュラム全体が苦痛なのではないだろうか。これは、学部全体で取り組むべき課題でもある。

また、今年は毎回の「小紙片」を媒介とした応答関係の実現にも課題を残した。そこには様々な感想・注文・要望が記されている。それをていねいに読み、細かく応答することは、実は授業への当事者意識、参加意識を喚起し、授業を活発化するうえで重要である。これはひとえに授業者の怠慢によるものである。